

---

# あの日の出会い

夜家見孝典

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの日の出会い

### 【Nコード】

N3289H

### 【作者名】

夜家見孝典

### 【あらすじ】

拓也は授業に出た事が無い、なぜ倉庫にしたかは書いた本人の気分次第だ。

## 詩織との出会い（前書き）

（小説というか・・・見る価値も無い物ですけど・・・最後まで見てくださると嬉しゅうございます。）

## 詩織との出会い

ある日、拓也はまた授業を抜け出していつもの体育館の倉庫で寝ていた。

まだ誰にもこの場所で安らいで居る事を知られては無かった。

すると次が体育の授業の生徒達がぞろぞろと体育館へ入って来た。

またいつもの様に女子達の喋り声・男子達のはしゃぎまわってる声が聞えて来た。

最初はうざいと思った拓也だがもう慣れてしまった。

「あ、道具準備するの忘れてた（笑）」

と女子の体育係だろうかと走って来るのが分かった。

ギイイイイッ

倉庫のドアが開く音が響いた。

「えっと・・・あれって何処だったかな・・・」

「あれ・・・何探してるんだっけ・・・あっ・・・そうだ！ボールとかがだったかな」

と何が必要なのか忘れてるその女子がこっちへ歩いてきた・・・。

（今思えば俺の後ろにあるのって・・・ボールじゃ・・・）

と一瞬思ったが、まあ見つからないだろうと安心してた拓也であった。

「あ、ボールあつ・・・」

とまあまあ美形の肌は狐色の小柄な女子が見つめたまま硬直している。

「何、何か用？」

と拓也はめんどくさ・・・と思いながら言った。

「あなた・・・不審者!？」

とその女子は言った。

「俺の制服見て分からないって、君頭大丈夫?(笑)」

と拓也は馬鹿にした様に言った。

「こう見えても私は頭は良いのよ」

と威張った様に女子は言った。

「へー、ボールだっけ?さっさと取って行ってくれないか」

と早く寝たい拓也であった。

「あ、そうだボールボール・・・」

ガチャンッ

「あーあ・・・籠倒れたじゃーん」

とその女子はわざとらしく拓也に言って来た

「俺がやったんじゃないから、さつさと片付けて行ってくれめんどくせえ・・・」

「さつさとしてほしいならさ、手伝ってよ（笑）」

と笑いながらその女子は言った。

「しょうがねえ・・・手伝ってやるからもう関わらないでくれ」

とだるそつに拓也は言った。

「今思ったけど何であなたここで寝てるの？」

とその女子は聞いてきた。

「お前には関係ない、さつさと片付けろ」

と拓也はちよつとキレ気味に言った。

「はいはい」

とその女子は返事をした。

「よかった、片付いたね」

「いい迷惑だよ、じゃあ俺は寝る」

「私は1年。組の南原詩織って言うの、後でまたここに来てあげようっ」

と詩織は偉そうに言った。

ギイイイガチャンッ

ドアを閉める時の詩織は笑っていた。

ボールを叩く音、床を踏む音、担任の笛の音、男女のはしゃぎ声が響いている。

キンコーンカーンコーンッ

授業が終わったみたいだ・・・。

（そつえば後片付けに詩織が来るのか・・・だるいな・・・）  
と拓也は詩織が来る事を忘れてはいなかった。

ギイイイイッ

とドアが開く音がした。

カラカラカラガチャツカラカラ

「来たよー、ちゃんと良い子に待ってたかな」

とボールを入れた籠を押して詩織がやってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はなぜか寝た振りをした。

「寝てるのかな・・・蹴ってみよう（笑）」

と詩織は笑いながら、拓也の頭を蹴ってきた。

「・・・・・・・・」

拓也 は対応がめんどくさいから出て行くまで寝た振りをしてみた。

「本当に寝てるのかな・・・じゃあ私がその唇貰ってあげよう フフ（微笑み）」

と詩織の髪の毛が拓也の顔に掛かった。

拓也は本当にされるんじゃないかと薄目でちょっと見た。

「あ、やっぱり起きてる」

「本当にやられると思ったの？（笑）」

と薄目を開けた時に目の前に詩織の顔があった。

「別に・・・されるとかどっちでもいいけどね・・・」

と残念そうに拓也は言った。

「でさ、何で授業出ないの？」

と詩織は微笑みながら聞いてきた。

「別に・・・気分次第だし・・・てか俺が決める事だから口出すなよ」

「はゝあ・・・どうでもいいじゃん」

と拓也は少しイライラしつつ横を向いた。

「ふゝん・・・そっか・・・」

「私もね、時々めんどくさい時あるからさっ　その時ここに来ていい？」

と詩織は言ってきた。

「勝手にすればいい・・・」

拓也は嫌な顔をせず、むしろ嬉しそうに言った。

「ふゝん、じゃあ明日めんどくさかったら来るね（笑）」

「じゃあねゝ　フフ（笑）」

ギイイイードンッ

と詩織は笑いながらドアを閉めた。

（この後もう何も面白い授業無いから、帰るか・・・）

と拓也は自転車に乗って家へ帰った。

- 次の日 -

拓也は朝来るなり体育館の倉庫にまた行った。

ギイイイイイガチャンツ

するとそこに詩織が座って居た。

「やあやあ・・・」

と詩織はしょんぼりした顔でこっちを向いた。

「何で朝早くから居るの？」

と拓也は不思議そうに聞いてみた。

「何と・・・なくな・・・」

と詩織は俯いたままだった。

「ふゝん・・・」

と言いながら拓也は詩織の隣へ座った。

「何かあったのか？」

と拓也は聞いてみた。

「別に・・・」

と半泣状態で詩織は言った。

「ちよつと・・・俺の親友連れてきていいか？」

と拓也は詩織以外知らない場所へ親友を連れて来てどうにかしてもらうか・・・と考えていた。

「別にいいよ・・・」

と詩織は言った。

「じゃあ・・・行ってくる」

「行つてらっしゃい・・・」

ギイイイイガチャ

「・・・グスン（泣）」

拓也は急いで階段を上がって親友の元へ行つた。

「ハアハア・・・孝典・・・」

と拓也は息切れしながら同級生（親友）の孝典を呼んだ。

「何だよ・・・眠いだぞ」

「・・・ツ・・・いやいや俺もだよ・・・ハアハア・・・ちよ・・・ちよつと来てくれ」

「まあいいけど・・・」

と孝典と拓也は倉庫に向かった。

「何だよ何かあるのか？」

と孝典は言った。

「ちょっと・・・どうにかしてくれないか・・・」

「おいおい何をだよ・・・まさか・・・！？そつちに目覚めたのか  
お前・・・！？」

「馬鹿・・・お前って馬鹿・・・」

ギイイイイガチャン

と言いつつ倉庫を開け・閉めた。

「ん・・・あれ誰・・・まさか！？監禁・・・！？」

「馬鹿としか思えないな・・・」

と孝典と拓也は漫才風にいつもながら話していた。

「お帰り・・・」

と詩織は言った。

拓也は泣いた後と分かったがあえて口に出さなかった。

「ただいま」

「で、俺にどうしろって言うんだ・・・」

「いや・・・その・・・んー・・・」

（説明がめんどくさいので全部今までの事を話した）

「ふむ・・・」

と困った顔で孝典は返事した。

「詩織さんはあれか！彼氏に捨てられたとか」

と孝典は率直に聞いてみた。

「違うよ・・・そんな事じゃないよ」

「じゃあ何」

「お父さんとお母さんが離婚する事になって私がどっちに着いて行くか喧嘩の毎日でもう嫌だよ・・・」

「ってそんな事じゃない気がするが・・・重大じゃないか」

孝典と詩織は話しをしているが拓也は何の言葉もかけてあげられなかった。

「どうせなら拓也の家にお世話になればいいさ」

「え？」

「だってどっちみち拓也一人暮らしだし」

「・・・」

「大丈夫さ、襲われたりしないさ多分」

「多分っておい・・・」

「クスクス」

孝典、拓也、詩織は楽しそうに話していた。

「てかさ、俺一人暮らしじゃないぞ？」

「あれ、違ったっけ」

「猫いるし」

「猫かよ」

まさに仲良しという関係だった。

そして詩織は一人残って両親と別れた後、拓也の家にお世話になる事になった。

- 拓也の家に着いたのは夜であった -

ガチャッ

「失礼します・・・」

と詩織はゆっくりドアを開けて入って行った。

「あっ！猫だ」

「お手つて出来るの？」

「いや芸は1個も・・・」

「ほらほら～お手っ！」

と詩織は拓也そっちのけで猫にお手を覚えさせようとしていた。

「じゃあ荷物ここに置いとくから、後部屋はここ以外・・・何処でもいいから」

と拓也は荷物を置き、詩織は猫と遊んでいるから静かに家を出て買い物に行った。

「あれ・・・拓也さんが居ない・・・」

「猫ちゃん・・・お手、おかわり」

何処行っただろうと思いつつ、猫に今度はおかわりを覚えさせようとしていた。

・その時拓也は・

「詩織何食べるんだ・・・まあ・・・適当に買えばいいか・・・何

でも食べるだろ」

「あ・・・そうそう猫の餌、猫の餌・・・」

ガチャッ バタンッ カチャッ

「ただいま、適当に買ったが文句は言うなよ」

と拓也は荷物片手に恥ずかしさを隠す為か頭をかいていた。

「おかえり、ねえねえ見てみてお手覚えたよ」

「え・・・人の猫に芸教えるなよ・・・お前」

「あ、お前この中から好きなもの取って食べていいから」

カチッ

「こここの段はお前の食べ物・飲み物入ってるから適当に飲み食いしてくれ」

と拓也は冷蔵庫に買った物を入れた。

「お風呂・トイレって何処？」

「お風呂はあっち、トイレはこっち」

「後分らない事あったら俺の部屋に来てくれればいいから」

「じゃあ、今日は遅いから寝るね」

「お休み」

「ああお休み」

と言って二人共自分の部屋へ戻って寝た・・・。

- 朝 -

(シャワーの音がする・・・詩織か・・・そういえば・・・)

と拓也はシャワーの音で目覚めた。

「おはよー朝のシャワーはいいね」

詩織はすっきりした顔で言った。

「ああ・・・あのさ・・・とりあえず・・・さ・・・まず床拭けよ・・・」

「分かった分かった　ほらほら拭き拭きしようね」

と言いつつ詩織は猫の手で床を拭きだした。

「猫の手で拭くのかよ・・・」

「案外拭けないね・・・」

(可愛いな・・・馬鹿だけど・・・馬鹿なんだけど・・・)

と朝から思っている拓也、朝から馬鹿っぽい詩織だった。

ピンポン

「はい」

と詩織が鍵を開け、ドアを開いた。

「おはようす、拓也は？」

「上がっていい？」

孝典が拓也に会いに来たのであった。

「おお、孝典 よっ」

「元気か」

と拓也を無視して猫の方へ向かった。

「っておい 無視かよ」

「ニヤ？」

「いやニヤじゃないだろ・・・で用何？」

「いや、二人があんな関係になってるんじゃないかと様子見だよ」

「そんな訳ないって（笑）」

声を揃えて拓也と詩織が言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気まづくなってしまった拓也・詩織・孝典であつた。

「でさ、今日は三人で・・そう！パーティーでもしないか」

「詩織さんの新たな一日という事で　ほら猫も手上げてる」

「いやいやお前が無理矢理してんだろ・・俺はいいが・・あいつがどう言つか・・」

「私は・・いいよ」

と言いながら猫をおもちやの様に孝典は遊んでいた。

「それじゃ、俺と孝典は買い物行って来るから留守番頼んだぞ」

「うん」

そう言い残して家を出て行った孝典と拓也だった。

## 第2話：告白前日（前書き）

拓也・孝典・詩織・3人で詩織の新たな1日という事でパーティーを開く事になったのだが・

## 第2話： 告白前日

「んー・・・てかさ・・・パーティーってどんなのいるんだ？」

と拓也は不安気に聞いた。

「えつとね・・・ケーキ・ビール・おつまみ・アイス・後詩織さんの飲み物」

「おい・・・何か親父臭いのが入ってるぞ・・・しかもビールって・・・馬鹿かお前やっぱり馬鹿か」

と店内全体に聞える程大きな声で話していた。

「って孝典まじでビール買ったのか・・・」

「うん、俺達はビール・詩織さんは・・・コーラでいいかなそれともミルクティーかな」

「両方買っとけ」

・その時詩織は・

「遅いねー拓也さんと孝典さん・・・」

ニヤアアアア・・・

「お腹空いたのかな・・・」

とマイペースな詩織だった。

「帰るか」

「おう」

と孝典と拓也は買い物を終えた様だ。

「なあ、拓也は詩織さんの事どう思っの？」

「別にただの猫好きの馬鹿女としか思えんけどな」

「そうか・・・これからの展開におらわくわくすっぞ」

「お前は馬鹿かやっぱり馬鹿なのか」

「ギャハハハハハ」

と帰りながら楽しそうに話していた。

ガチャガチャツ    カチャツ

「ただいまー」

と孝典と拓也は帰ってきた。

「おかえりニヤさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ニヤさいって・・・」

「よし、これからパーティーだー」

と準備を始めた拓也・詩織・孝典だった。

「あれ・・・これお酒・・・」

と詩織は興味本意でビールを手にした。

カチャッ

「・・・まずい・・・」

と詩織は顔を歪めて言った。

「こっちは大方準備出来たぞ、詩織」

「・・・・・・・・・・」

「詩織？」

と拓也は詩織の方を見た。

「おい、お前ビール飲んだのか？」

「美味しくなかった・・・」

「当たり前だ・・・おい孝典・・・こいつの面倒見といてくれ」

「あ？あーあ、ビール飲んじやったか・・・」

と拓也は詩織の代わりに準備・孝典は詩織の面倒を見る事になった。

「ふう・・・何で俺がこんな事・・・・・・・・」

「拓也ー・・・・・・・・」

「何」

「シート・・・詩織さん寝ちゃったみたい・・・」

「おいおい誰の為に準備したと思ってるんだよ・・・」

と一揆にやる気を無くした拓也であった。

「しょうがない・・・二人ですか、せっかく買ってきたし」

「だな」

二人でパーティーをする事に決まったらしい。

「乾杯ー」

「何だ・・・中学生がビールで乾杯って・・・」

「まあいいじゃん、ほらほらおつまみもあるぞ」

・ 2 時間後 ・

「なあ、拓也・・・お前詩織さんの事好きなんだろ？」

「いきなり何言っただよ、酔ったか？」

「いや酔ったけど・・・あ、そうだ・・・」

「ヒソヒソヒソヒソ・・・ヒソヒソ」

「やろうよ（笑）」

「やってみるか」

と拓也と孝典は何か企んでいた。

拓也と孝典はおつまみを持って詩織の元へ行った。

ゴソゴソッ

「おい、あんまり口に入れると喉詰まるぞ」

「大丈夫だって、柿ピーで死ぬ奴見た事ねえよ」

と拓也は孝典の反対を押し切って口におつまみの柿の種を入れた。

「ピーナッツ鼻に入れてみるか？」

「おい・・・お前・・・俺知らないからな」

と孝典は青ざめた表情で詩織の方を見た。

「何だ・・・」

「た・・・拓也さん・・・（怒）」

「よし、孝典あつちでまたパーティー開始だ（汗）」

拓也は詩織から早く逃げたかった。

「拓也さん！！！」

「おいおいおい・・・おつまみ投げるな」

と詩織は拓也の持っていた柿の種を投げ始めた。

「痛いって・・・痛っ・・・」

「ちよつと・・・詩織さん俺関係ないから・・・俺止めたから！」

「ふゝん・・・」

と詩織は言った後拓也を睨んで集中的に狙い始めた。

「ちよ・・・俺悪くないってゝゝゝビール飲んで勝手にパーティー中断させたお前が悪い」

「・・・」

「（怒）」

「ちよ・・・それだけは止める・・・」

と詩織が手に取ったのはまだ飲んでないビールであった。

カチャッ

「おい．．．それ不味いんだろ」

と詩織は怒りを抑えビールを飲んだ。

「パーティー再開か！」

と孝典が大声で言った。

「おう！」

- 1時間後 -

完全に詩織は泥酔した。

「αζθφ．．．．．ZZZ」

と詩織は何を言ったか分からないまま寝た。

「寝ちゃったよ．．．」

「だな」

「本当の所、俺は詩織を好きなのかも知れないな」

「可愛いよな詩織さん．．．．」

「お前も一緒か．．．」

「じゃあさ、明日朝俺が告白するからお前夜にしろ・・・それで結果どっちになっても恨みっこなしだ」

### 第3話 拓也と孝典の災難（前書き）

孝典と拓也は詩織に告白すると決めたものの・・・

### 第3話 拓也と孝典の災難

・日曜日・

「ふあゝゝあ．．．．．頭痛い．．．」

「よっ．．そりやそうだろ．．．」

「しかし．．．．．凄い寝癖だな．．．」

朝起きた詩織はライオンの鬘見たいにぼっさばさの髪の毛をしていた。

「お風呂入ってくる．．．．．」

「ああ．．．俺は片付けしとく」

と詩織はシャワーを浴びに・拓也は後片付けをしていた。

「おいこら孝典起きろ．．．」

「んーん．．．」

「．．．．．起きろって言ってるだろ」  
ニヤッ

と拓也は猫の手で孝典の顔を叩いた。

「んー．．．クラクラする．．．」

「今日は俺からだからな」

「ああ・・・あんまり大きな声は出さないでくれれば光栄だ・・・」

「分かった分かった・・・」

と拓也は孝典をほって片付けを始めた。

キュルルルルッ

詩織はシャワーを終えた様だ。

「ちよつと顔洗ってくる・・・」

「あ・・・ちよ・・・まだ」

ガチャッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と詩織と孝典は目があつたまま硬直した。

「・・・・・・・・!!!!!!」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

と詩織は大声で叫んだ。

「あごめん!!!!!!」

バタンッ！

と慌てて孝典はドアを閉めた。

（カーーーーーー）

二人共顔を真っ赤にさせていた。

「何で言ってくれなかった拓也・・・」

「言おうとしたが、お前が開けちまったんだから仕方ないだろ」

「見ちゃったじゃないか！」

「ほほう・・・見ちゃったのか・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガチャッ

詩織が出てきた。

「・・・・・・・・・・」

空気が重くなった。

「詩織、風呂から出て早々すまないが、片付け手伝ってくれないか」  
と拓也が気まずい空気をどうにかしようと言った。

「う・・・うん」

「じゃ・・・じゃあ俺は顔洗ってくるよ・・・」

と孝典は顔を洗いに行った。

「まあ、気にするな（微笑み）お前の体見られたってどって事ないだろb」

と拓也は微笑みながら言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ウウ・・・（泣）」

詩織は泣き初めてしまった。

「え・・・俺何か不味い事言ったか・・・」

と事の重大さに気づいてない拓也だった。

（そんな事も知らずに孝典はドキドキしながら顔を洗っていた）

ガチャンッ

「ふ・・・ふう、スッキリした・・・」

と孝典は顔を洗って出てきた。

「おい、拓也何で詩織さん泣いてるんだ？」

「いや・・・俺何か不味い事言ったのかな・・・」

「何て言っただ？」

「いやさ・・・お前の体見られたってどって事ないだろって言  
つたら・・・」

「お前馬鹿か・・・大抵見られたら心に傷負うだろ・・・」

「そうなのか!？」

「当たり前だ!馬鹿!」

と拓也と孝典が話していると・・・。

ウウツ・・・

バタンツ

詩織は自分の部屋へ籠ってしまった。

「ほら・・・」

「・・・すまん・・・あの件は引き伸ばしでいいか・・・」

「ああ・・・」

「ちょっと謝ってくるわ・・・」

「そうしろ・・・」

と今までまともに謝するという事を知らない拓也が謝するという事を覚えてた。

トントン・・・

拓也が詩織の部屋のドアをノックした。

「詩織・・・ごめん・・・」

「・・・・・・・・・・」

「詩織・・・？」

「ZZZ」

（寝た振り寝た振り・・・）

と詩織は寝た振りをし続けた

「って寝たんかい！」

「はーあ・・・」

と拓也はため息を吐きながら孝典の元へ戻って行った。

カチャツ・・・

詩織は孝典と拓也の話を盗み聞きしようとしていた。

「なあ、いつ詩織さんに告白する・・・」

「告白!?!?・・・」

「ッ・・・!」

「ん・・・し・・・詩織?」

カチャツ・・・

(寝た振りしないと・・・ドキドキドキ・・・でも告白って・・・どっちが!?!?・・・)

「猫かな?」

「だろうな・・・あの猫結構詩織さんに芸覚えさせられてたから懐いたんじゃないか?」

「かもな」

「ハハハハハ(笑)」

拓也・孝典は詩織が話を聞いてる事を知る訳わ無かった。

「なあ孝典、外でもブラブラしないか?」

「しょうか、でも詩織さんに言っておかないと」

「詩織さん、拓也とちょっと外ブラブラしてきますね」

「・・・・・・・・」

「寝てるのかな」

ガチャッ バタンッ

孝典と拓也は外へ行った。

「行っちゃった・・・・・・・・告白・・・・・・・・どっちが・・・・・・・・」

詩織はどっちが告白するのかを考えていた。

「はははは（笑）」

「なあ、今日の夜にしないか？告白・・・・・・・・」

「何言ってるんだよ・・・・・・・・」

「おらワクワクすつぞ」

「だから馬鹿かって（笑）」

「お前もだろーが（笑）」

（いつもこの電信柱邪魔だな・・・・）

ドンッ

ドゴオオオオオオオンッ！！！！  
イイイ！！！！・・・

キイイイイイイイイイ

ガチャッバタンッ！

「だ．．．大丈夫ですか！？」

トラックの運転手は駆け寄った。

「た．．．拓也．．．．．？」

ちょうど狭い道で電信柱を避ける為、孝典は拓也を押してしまった。拓也は走行中のトラックのサイドミラーに頭をぶつけ数m飛ばされた。

「おい！拓也！．．．拓也！．．．．．拓也！」

孝典は拓也を抱え何回も叫んだ。

その場に警察・救急車が来た．．．。

孝典は尋問に答えた。

「あなたは？」

と警察の人が聞いてきた。

「友達です．．．．．」

孝典は頭が真っ白になっていた。

「何か知ってる事あったら教えてくれないか？」

と警察の人は血相を変えて聞いてきた。

「電信柱を避ける為避けたら拓也を押してしまっ……」

と孝典は正直に言った。

「警察に来てもらいましょうか」

と孝典は真つ青な顔をしてパトカーに乗った瞬間腰を抜かした。色々な尋問を受け・懲役3年と決まった。

## 第4話 再開（前書き）

拓也が事故で亡くなってしまった・・・詩織に幸せがあるのか・・・

## 第4話 再開

- 外へ出て行った後詩織は -

「猫ちゃんおいで、一緒に寝ようよ」

詩織は猫と一緒に寝た・・・拓也と孝典がどんな状況になっているかも知らずに。

- 数十分後 -

ブルルルルッ・・・ブルルルルッ・・・ブルルルルッ・・・

只今留守にしております、ピーと鳴りましたら名前とご用件をどうぞ。

ピーッ

あ、こちら。。警察と申します、そちらに南原詩織さんという方はいらっしやいますでしょうか。

そちらの川島拓也さんが事故でお亡くなりになりました・・・お電話をさせてもらったのですが・・・折り返し電話させていただきます。

留守番電話に亡くなった事が知らされた。

- 夕方 -

「あれ・・・猫ちゃん居なくなってる・・・」

ガチャッ

何も知らずに詩織はリビングへ向かった。

「あれ・・・留守電？」

現在の留守電は1件です。

あ、こちら。○警察と申します、そちらに南原詩織さんという方はいらっやいますでしょうか。

そちらの川島拓也さんが事故でお亡くなりになりました・・・お電話をさせてもらったのですが・・・折り返し電話させていただきます。

「・・・・・・・・・・！」

バタッ・・・

詩織はその場で腰を抜かしてしまった。

「た・・・拓也さん・・・が・・・？」

「・・・・・・・・・・」

「拓也さああああん！！！！！！（泣）」

- 深夜 -

「・・・そういえば・・・孝典さん・・・居ない・・・・・・・・・・あっ・・・

・警察に電話しないと・・・」

詩織は孝典が居ない事を不思議と思った。

「あ・・・もしもし・・・南原詩織と申しますが・・・川島拓也さんの件で・・・」

ハーッ・・・フー・・・フーッ・・・

詩織は泣きたい気持ちを抑えつつ深呼吸した。

「お電話代わりました、電話した。。。ですが、南原詩織さんですか？」

「・・・はい・・・」

「家族の元へ連絡しようとしたのですが、家族は居ないと言われまして、彼女なら居るといわれましたので連絡を」

（私が・・・彼女！？・ドキッ・・・）

「だ・・・誰がですか・・・？」

「えつとですね、事件を起こした坪井孝典という方です」

「え・・・・・・」

「な・・・何で亡くなったんですか・・・？」

「説明しますね」

「まずトラック1台半くらいの道を二人並んで歩いていたんですが」

「孝典さんが電柱柱を避ける際に拓也さんを押してしまつて、走行中のトラックのサイドミラーに後頭部をぶつけ即死です」

「そう・・・なんですか・・・」

「孝典さん・・・はどうしてるんでしょうか・・・？」

「懲役3年の罪で刑務所に入っています」

「そうなんですか!？」

「いちお避けただけというだけで、計画性は無いのですが、人が命を落としたという事で3年に」

「そうですか・・・ありがとうございます・・・」

「では、用事がありますので、これで」

「ありがとうございます・・・」

ガチャンツ・・・

ガチャツ バタンツ

詩織は部屋へ戻って号泣し続けた。

拓也・孝典が居なくなつた家にずっと在住して、孝典の帰りを待つ

た。

葬式・その他を担任・詩織で準備した。

・色々あつて早3年・

高校生になった詩織・孝典が刑務所に入っている事は忘れ、元気に学校に行っていた。

・下校したのは夜の10時・

「鍵何処だっけ・・・」

「・・・・・・・・」

「あつた」

カチャツ

朝鍵を閉めて行つたはずなのに鍵が閉まっていなかった。

「詩織さん・・・？」

（何で私の名前知ってるの・・・！？）

泥棒かと思った詩織は友達にいちお電話の準備をして、家の中へ入った。

「誰・・・？」

「俺だよ、孝典・・・」

「・・・・・・・・!!!!!!」

詩織は思い出した、懲役3年・・・3年経った事を・・・。

「孝典さん!?!」

ガチャッ

リビングへ行くと土下座している孝典がいた。

「ごめん・・・詩織さん!・・・拓也を・・・拓・・・也を・・・(泣)」

土下座をしながら泣き崩れていった。

「いや・・・いいですよ・・・過ぎた事ですし・・・拓也さんにはこの言い方申し訳ないですけど・・・」

と詩織は俯きながら言った。

「すまない・・・詩織・・・何もかも・・・」

と言ったまま沈黙がしばし続いた。

「今日は遅いから孝典さんも寝てください」

「え・・・いいんですか?」

「はい、拓也さんの部屋を・・・使ってください」

「・・・ごめんね・・・気を使わせちゃって・・・」

「おやすみ・・・」

二人は一緒に住む事になった。

・翌朝・

「ふっ・・・うん」

「あ、おはよう」

「早いね・・・」

「今日学校行くけど、孝典さんどうするんですか？」

「同じ学校行こうかな・・・」

「そうですか・・・」

（同じ・・・）

詩織は勉強大丈夫なのか聞こうとはしなかった。

ガチャッ

「あ、孝典さん待ってください、これこの家の鍵です」

「いいの・・・？」

「鍵が無いと不便だと思いますので」

「ありがとうございます・・・」

バタンツ ガチャ

「詩織さんが行ってる学校って頭良いんですか・・・？」

と不安気に孝典が聞いてきた。

「私が通っている高校は成績がよくななくても入れるから、大丈夫だ  
と思うよ」

「私も一緒に行つてあげるから」

と詩織は丁寧と言った。

「そっか・・・」

・しばらくして・

「えー、今日から皆さんと一緒に勉強する坪井孝典さんです」

「坪井孝典です。1年生の南原詩織の兄です、これからよろしくお  
願いします」

（あれ・・・詩織さんの兄？・・・なんで俺・・・）

孝典は詩織の兄と勝手に・・言ってしまった。

## 第5話 新たな出会い（前書き）

転校早々暮らすで一番馬鹿な知恵に出会った孝典であった。名前が知恵なのに馬鹿だった・・

## 第5話 新たな出会い

あの事故の事は余り知ってる人は居なかった。

「うちはこのクラスで一番天才の藤井知恵って言うの、よろしくね  
孝典君（微笑み）」

と言って来たのがクラスが誇る一番の馬鹿で外見は肩までの髪・肌はちょっと狐色・詩織よりは少し美人であった。

「おい、知恵・・・クラスで一番天才って・・・お前正気か！（笑）」

とクラスの男子が笑いながら言ってきた。

「そうなのだよ！うちが一番天才さ」（微笑み）」

「知恵」

クラスの女子が知恵に話し掛けてきた。

「今回のテスト何点が言ってみて（笑）」

「そんなに聞きたいの？」

「あんまり・・・」

「あんまりか・・・私の顔に泥を塗ってもらっちゃ困るよ」

と知恵は大きな声で言った。

「今年のテストの点数は合計で！．．．．．37点！」

「．．．．．低．．．．．」

とクラスの全員があまりの低さに言葉を失った。

「さあさあ、分からない事があつたら私に聞くといいよ」

「じゃあ、お願いするね．．．知恵さん」

「（微笑み）」

孝典がお願いすると知恵は微笑んだ。

「1時間目体育だから」

とクラスメイトが教えてくれた。

「体育って．．．俺．．．保健室行つていい？」

「良いと思うよ」

「そっか」

と孝典は安心する様に言った。

知恵さん居ないし自分の力で保健室見つけるか．．．。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・保健室何処だあああああっ！」

孝典は保健室の場所が分からず校内を周っていた。

「あ、いた」

知恵だった。

「やっと見つけたよ保健室は・・・・・・・・って・・・・・・・・ここ何処・・・・・・・・」

「え・・・もしかして・・・」

「いや！迷子なんかじゃないよ・・・（苦笑い）」

「えつとお・・・・・・・・スンツ」

知恵を見ると泣いていた。

「え・・・俺？俺のせいなのか？」

と孝典は尋ねた。

「うん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・違っって言えよ・・・」

「もう帰れないのかな・・・・・・・・うち達・・・・・・・・」

と知恵は泣きながら言った。

「はいはい、おんぶするから乗れ」

「え．．．おんぶ．．．？」

「帰りたいんだろ？」

と孝典はまたまた尋ねた。

「うん．．．帰りたいよお．．．」

ヨイシヨツ．．

「うち軽いと思うけどなあ．．．きっと．．．」

「ぎっくり腰だけは簡便だぞ．．．」

と孝典は恐る恐る言った。

知恵を見ると子供みたいに見えた．．．。

「走り周るけどいいか？」

「うん．．．．」

孝典はひたすら走り周った。

「ハアハア．．．いい運動になるのはなるんだが．．．キツイ．．．」

と孝典は息切れしながら言った。

「あ……見つけた！屋上！」

「屋上かよ……まあいい、行ってみるか」

ガチャガチャ

鍵が掛かっていた。

「えー鍵掛かってたかあ……」

「ちよつとどいて」

と孝典はポケットからなぜかコンパスを出した。

「なぜポケットに……」

と知恵は普通に聞いた。

「防犯用」

と孝典はふざけている様子もなくまじめに言った。

カチャッ

「開いた！」

二人声を揃えて言った。

ガチャッ

「・・・・・・・・・・よし帰ろう」

「そうだね・・・うちはここ簡便だよ・・・」

二人は立ち去った、なぜなら鳥のフンだらけだったからだ。

「あ、ここ行けば多分保健室だよ」

知恵は適当に言ったとしか思えなかった孝典だった。

「本当に？」

「うん」

「自信は何%？」

「・・・・・・・・10%！」

「・・・・・・・・おい・・・」

「やっぱり・・・？」

と言いながら知恵が言った方向に行ってみた。

「うわ・・・10%の奇跡って凄いな・・・」

孝典と知恵は見事・職員室へ辿り着いた。

だがもう3時間目が始まっていた。

- 放課後 -

「じゃあねーバイバイ」

と知恵は片手をブンブン振って言った。

「よし・・・屋上掃除でもしてみるか・・・」

- 1時間後 -

「やっと終わった・・・」

「これで明日あいつをここへ連れてきてみよう・・・」

孝典はそう思い歩いて家へ帰った。

カチャッ バタンッ

「ただいま」

「お帰りなさい、孝典さん」

何か新婚みたいで内面嬉しい孝典であった。  
孝典は今日あった事を詩織に話した。

「そうだったんですか・・・、大変でしたね・・・」

「今度私も知恵さんにお会いしたいです」

と詩織は笑って言った。

・翌朝学校・

「おはよう」

「おっす」

「昨日はごめんね、重たかったろくに足腰鍛えられたろくに」

「全身筋肉痛にならなくてよかったですよ・・・」

と孝典は言った。

「そうだ知恵さん、詩織さんが会いたって言うてるんですけど」

「詩織さん？」

「ああ、1年の南原詩織です」

「あゝいいよ（笑）」

「あ、後屋上行きませんか？」

「え・・・本当に行くの・・・？」

「はい」

と孝典は知恵の手を取って屋上へ向かった。

ガチャッ

「うわー！あのソボロみたいなのが綺麗になってる」

「ソボロって・・・昨日放課後掃除してみました」

「へっ・・・でも案外ここ・・・ちょっとまだ微妙に入り辛いね・・・」

「何で？」

「だって・・・ソボロ掃除した後でも汚いじゃん・・・」

「だからソボロって・・・いやシートでも敷いて俺はここで寛ぎますよ」

「そう・・・なんだ・・・」

知恵はまだ入りたいとは思っていなかったらしい。

「ねえ・・・ソボロのゴミ袋って何処へ捨てたの？」

と知恵は恐る恐る聞いてみた。

「ああ、それでしたら・・・下駄箱の横の物置ありますよね？」

「そこへ隠しました」

「え・・・隠すってまさか・・・」

「処分してませんよ？」

「……………」

知恵の嫌な予想は当たった……。

「だけどさゝ屋上綺麗にしてくれてありがたいかも」

「何で？」

「だってさゝ、うち空見るの大好きだし」

「そうなんだ」

「うん、お昼寝大好き」

「ん……空見るのがじゃないの？」

「何時言っただうちがお昼寝なんか」

「まあいいや」

と孝典と知恵は話していた。

「やがて学校は終わり知恵は孝典の家へ行く事になった」

ガチャッ

「ただいまー、知恵さん連れてきたよ」

「お邪魔しまゝす」

「あ、お帰りなさい孝典さん、知恵さん」

と知恵は足元からじつくりと詩織を眺めた。

「あなたが詩織さん？」

「はい」

「そっか」

と知恵は言った。

「どうぞ、お上がりください。」

「失礼しまゝす」

ガチャッ

3人はリビングへ来た。

「あれ・・・あれって誰ですか？同い年に見えますが」

と知恵は拓也の遺影を見た。

「あれは・・・僕の親友です」

と孝典は俯きながら言った。

「…………ごめんね…………」

と知恵は聞いちゃいけなかったと悟った。

「知恵さん今日泊まります？」

詩織は聞いた。

「いや…………親が待ってるもので…………」

と知恵は微笑み会釈しながら言った。

「でさ知恵」

「何？」

「あの屋上は俺達だけの秘密だ」

「分かってる、けどね孝典君」

「ん？」

「確実に詩織さん聞いてるよ」

「いや良いよ」

と孝典は3人の秘密にした。

「詩織」

「何ですか？」

「学校の屋上何時でも来て良いからな」

「え．．．でも．．．あそこは．．．」

「いや俺が掃除したから大丈夫」

「そうなんですか？」

「じゃあ行ってみようかな．．．」

と詩織は悩みながらも言った。

・翌日学校・

「おっす」

「昨日はごめんね．．．孝典君」

「いやいや．．．」

「お礼したいから後で屋上来てくれない？」

「分かりましたー」

・1時間目終了・

ビシッ

「痛・・・」

するといきなり消しゴムが後ろから勢い良く飛んできた。

「何々・・・屋上来てね by 知恵」

「何も消しゴムじゃなくてもいいだろ・・・」

と孝典は呟きつつ屋上へ向かった。

ガチャッ

「おっ、来たね〜どうだった？私の剛速球は」

「痛かったわ・・・リアルに・・・」

「そっか・・・ごめん・・・調子に乗りすぎたみたいだねうち・・・」

「いやいや別にいいさ」

「で、お礼って何ですか？」

と孝典は率直に聞いてみた。

「お礼はこれだ〜」

と言いつつ知恵は目を瞑り唇を出してきた。

「キスがお礼？」

と孝典はストレートに聞いてみた。

「正解！」

といつもの馬鹿っぷりを見せた知恵だった。

「私のファーストキスなのだよ」

と知恵は行き成り言い出した。

「へっ・・・じゃあ俺が貰ってあげよう」

と嘘で孝典は言った。

「そっちがしないなら、こっちから行こうか」

知恵が背伸びをしてキスをした。

「・・・・・・・・」

「まじでする奴が何処に居る！」

と孝典は冗談で言っただつてもりなのに本気でする知恵に言った。

「貰ってあげようって言ったのはそっちだよ」

と知恵はすぐさま言い返した。

「俺はこれ以上は責任取れないからな」

と孝典は言い残し学校を早退した。

## 第6話 仕返し（前書き）

孝典は嘘で言っただけだが、知恵は本気でキスをした。本気でするとは思わなかった孝典は無意識に学校を早退した。

## 第6話 仕返し

「うち悪くないよね・・・でも・・・あつちは本気じゃなかったみたいだし・・・謝った方がいいのかな・・・」

と知恵は孝典の後をすぐ追った。

「はぁ・・・」

「お兄ちゃんお兄ちゃん、暇なら遊ぼうよ」

と近所の小さな男の子が孝典の元へやってきた。

「何をして遊ぶ？」

「うーん・・・」

「じゃあさ、鬼ごっこしようか」

「うんっ！」

と孝典とその子供は鬼ごっこをする事になったが、子供より孝典の方が喜んでいた。

「じゃあ鬼を決めよう、ジャンケンでいい？」

「うん」

「後出し無しだよ？」

「うん」

「ジャンケン ポイ」

「よっしゃ!」

と孝典は子供みたいに喜んだ。

「じゃあ10秒数えてから開始ね」

「うん 10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・行くよー」

とその子供は言った。

「何してるんだろ・・・」

と知恵は遠くから見ていた。

「捕まって堪るか!」

「・・・知恵・・・?」

(走っていると孝典は遠くから知恵が見ている事が分かった)

と孝典は相手が子供だから手加減して走った。

「はい タッチ!」

とその子供は嬉しそうに孝典の腰にタッチした。

「よし・・・今度は俺の番だ　10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・行くぞー」

（知恵・・・か・・・よしあいつを捕まえに行ってみよう・・・）

「見つけたぞおおおおおおお」

と孝典は知恵へ向かって全力で走ってきた。

「え？なんでこっち来るのよ！」

と知恵は逃げた。

「俺は鬼だからな！」

「うちは・・・鬼ほっほ（ごっこ）・・・参加してないよ・・・」

とへとへとを知恵であった。

「捕まえたー・・・ハアハア・・・ゴホッ・・・」

と孝典は知恵に抱きついた。

「え・・・？離してくれないかな・・・」

「疲れたよ・・・」

と孝典は子供みたいに抱きついてきた。

「あゝ．．疲れた．．．鬼ね．．．」

と言つて孝典は知恵から逃げた。

「子供狙うかな．．．うちは．．．」

と知恵は子供を狙う事にした。

「待てゝ．．．ハアハア．．．早すぎる．．．」

「お姉ちゃんここまでおいでゝ　アハハハ（笑）」

と知恵は子供に馬鹿にされる様に追いかけた。

「やつと捕まえた．．．」

「じゃあ僕が鬼だね　10．．9．．8．．7．．6．．5．．4．．3．．2．．1．．」

と子供は数を数えだした。

「孝典君．．うちもう駄目．．．疲れた．．」

と知恵はブランコに腰を掛けた。

「ばてるの早．．．（笑）」

と孝典は今度はブランコを思い切りこぎだした。  
子供が知恵へ向かつて走ってきた。

「たつちゝゝ」

「え・・・うちかいな・・・」

と子供は知恵へタッチした。

「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・  
0 はい孝典君タツ・・・って居ないし・・・」

孝典は知恵がタッチされた直後に逃げていた。

「孝典君ゝ出てきなさい（微笑み）」

と知恵は孝典の方へ歩いて来た。  
ふと知恵は上を見た。

「見つけた・・・やっぱりここかぁ・・・フッフ（微笑み）」

ヨイシヨ・・・

と知恵は一生懸命木を登ろうとした。

「おい、止めとけて」

「大丈夫・・・」

「降りるからさ、止めるって」

と孝典は木から降りたが知恵はまだ木にしがみ付いている。

「離せない・・・」

落ちたらしもし木の棘が刺さるんじゃないかと木を離せなかった。

「分かった分かった・・・ちよつとじつとしてろ」

と孝典は知恵の脇を持って木から降ろした。

「あ・・・ありがとう・・・でもね・・・鬼は鬼だよ」

と知恵はタッチしてきた。

「ばゝかばゝか」

と知恵は手を振りながら言った。

「・・・馬鹿はお前だろ！」

と孝典は言い、知恵を追いかけた。

・夕方・

「ばいばい　お兄ちゃん達」

と子供は手を振ってお母さんの元へ帰った。

「はあ・・・まじで疲れた・・・腰痛いわ・・・」

と孝典は腰を抑えながら言った。

「どうするの？これから・・・」

と知恵はブランコに座って言った。

「俺は家に帰るけど・・・知恵さんは？」

「疲れたし・・・自分の家帰る気力が無いし・・・近い孝典君の家・・・今日は泊まらせてもらおうかな・・・ちよつと家に電話するね・・・」

と電話している知恵の姿はどこか寂しげに見えた。

「おまたせ・・・」

「じゃあ帰るか、あーっ疲れた・・・早く布団に入りてえー」

「うん」

「家に着いた。」

ガチャッ

「ただいま」

「お邪魔します・・・」

「お帰りなさい・・・あれ・・・？知恵さん？」

「ああ・・・ちよつと遊んでたら気力使い果たしたみたいだから今日

「ここで泊めてもいいかな？」

「いいですけど・・・布団ありましたっけ・・・・・・・・・・」

「いや、探さなくていいですよ・・・詩織さん、知恵は俺の所で寝てもらえばいいし」

「え・・・それじゃあ孝典さんは何処で寝るんですか？」

「ああ リビングで寝るよ」

と孝典・知恵・詩織は話ながらリビングへ向かった。

ガチャ バタンツ

「詩織さん一緒にお風呂入りませんか？」

「いいですよ」

と言って二人はお風呂を入りに行った。

「俺は寝るか・・・」

と薄い布団に入った。

「本当に疲れたー・・・」

ガチャツ

孝典が寝ている事を知らずに詩織と知恵がお風呂から帰ってきた。

「いやーまさか詩織さんにバストを負けるとわ・・・」

と知恵はしょんぼり顔で言った。

「あれ・・・孝典君寝てる・・・」

「だねー・・・あれだけ・・・はしゃげば疲れるでしょ・・・」

「そうだ・・・1回私がされて事をしてみようかな・・・」

「された事・・・？」

「ゴニョゴニョゴニョ・・・」

「いいね！」

と詩織と知恵は企んでいた、その為の物をコンビニへ買いに行った。

- 数十分後 -

カチャッ カッチッ

「そーつとだよ、うち口開かせるから」

「なかなか開いてくれない・・・」

「ん・・・何・・・」

と孝典は目を覚ました。

「あ？起きたの？」

「何これ・・・」

孝典の口の周りにはチョコがついていた。

「詩織さんまで・・・3年前の仕返しですか・・・」

「やり返さないかね（笑）」

と詩織と知恵は向き合って笑った。

「しかし・・・何か懐かしいな・・・」

「だね・・・」

と孝典と詩織は俯いた。

「懐かしさを愛しんだ所で寝ましようか詩織さん」

「はい」

と言って詩織と知恵は部屋へ戻った。

「おいおい・・・人起こしておいて寝るって・・・」

と孝典は頭をかきながら俯いた。

「まあ・・・寝るか・・・」

と云つて孝典は顔を拭いて寝た。

## 第7話 事件現場（前書き）

拓也と孝典にあの日された事を昨日仕返した、詩織・知恵だった。

## 第7話 事件現場

・翌朝・

「これ食べていいの？」

「いいと思うけど・・・」

「ん・・・ん」

孝典が目を覚ますと、二人共朝食を食べていた。

「あ、起きた？昨日はごめんね（微笑み）」

「詩織さんの背中に悪魔の羽が見えてきた・・・」

「元々あるよ」

と詩織はパンを食べながら言った。

「俺の分も買ってくれたか？」

と孝典は不安そうに言った。

「何を食べるか知らないから・・・買っていないよ」

と申し訳なさそうに詩織は言った。

「いや、俺は俺で学校行く途中に買っからいいよ」

「あ、じゃあこれその代金ね」

と詩織は財布から千円を出した。

「え・・・俺お金持つてるから要らないよ」

「そう・・・？」

「うん」

「じゃ、うちが貰う」

「・・・・・・・・・・」

「無視ですか・・・」

と知恵はしょんぼり顔で言った。

「さて、じゃあ私はお先に学校行きますね」

ガチャッ

と言って詩織は先に学校へ行った。

「行っちゃったな・・・」

「寂しいんだ（笑）」

と言つて知恵は笑いながら言つてきた。

「まあな・・・拓也が居る時は俺も拓也も好きだったからな・・・」

「へー・・・じゃあ・・・今は・・・？」

「今は・・・申し訳ない気持ちで一杯かな・・・」

と孝典は言つた後俯き目が潤んでいた。

「そつか・・・」

ポンポン

と知恵は孝典の肩をポンポンと叩いた。

「さて・・・俺達も学校行くか・・・俺は朝食買つて行くけどついで来るか？」

「うん」

ガチャッ バタッ カチッ

「んー・・・今日の朝食何にしようかな・・・」

「おにぎりとか・・・」

「おにぎりか・・・んー・・・おにぎりでもいいか」

と二人話ながらコンビニへ行つた。

「あつたあつた・・・鮭と・・・ツナ・・・後午後の紅茶でいいか・・・」

「うち・・・は・・・このクリームパン買ってもらおうかな」

「買ってやるから・・・さっさと出せ」

「105円が2点・120円が1点180円が1点　510円になります。」

「ありがとうございました」

と孝典と知恵はコンビニを出た。

ただ・・・学校に行くには拓也の事故があつた所を通らなければならなかった。

今度は詩織さんが居ないから知恵に頼むしかなかった・・・。

「知恵・・・ちよつとここから俺目瞑るから・・・その道通り過ぎたら言ってくれないか・・・」

「え・・・なんで？」

「いいから・・・頼む・・・」

と孝典は言つた。

「分かつたから早く目瞑りなさい」

と知恵は言い、孝典は目を瞑つた。

「通り過ぎたよ」

またまた・・・嘘でしょうっと思つて途中の道で  
と知恵は言つてしまった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

孝典はその場で涙を流し腰を抜かし氣を失つた。

「え・・・嘘・・・・・・・・」

「孝典・君・？」

と孝典が本気で言つたと氣がついた知恵であつた。

ガチャガチャツ バタンツ！！

知恵は孝典を負ぶつて詩織と孝典の家へ戻つた。

「どど・・・どうしたらいいのかな・・・」

と知恵は慌てて学校へ連絡して詩織を呼んでもらつた。

「あ、もしもし・・・詩織ですが」

「あ・・・し・・・詩織さん・・・？」

「その声は知恵さん？」

「あの・・・孝典君が倒れたんですが・・・」

「え・・・すぐ家に帰りますね!」

と言って詩織は電話を切り早退して家へ帰った。

ガチャッ バタンッ!

「孝典さん!？」

「あ・・・詩織さん・・・」

「どうして倒れたんですか!？」

「その・・・学校に行く途中の細道で目暝るからって孝典君が言ってまた冗談なのかなと思って・・・半分の行った所でいいよって言ったら急に・・・」

「・・・・・・・・」

「知恵さんあなたって人は・・・」

「あそこでは拓也さんが事故で・・・」

「そうだったんですか・・・・・・・・」

ふと二人は孝典を見ると孝典は涙を流していた。

「またあの日の事を思い出してるんですね・・・」

「そうなんですか？」

「ええ・・・昨日も泣いてましたから・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うちは看病するので・・・詩織さんはまた学校に戻ってくださいですよ・・・」

「急いで帰って来ますので・・・何かありましたらここへ電話を・・・」

「はい・・・本当にすいませんでした・・・」

と言って知恵は泣きながら言った。

「では・・・私は戻りますね・・・」

ガチャッ バタンッ カチャッ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

（本当にあそこで拓也さんが亡くなったんだ・・・）

と知恵は心の中で思っていた。

・・・沈黙数時間後・・・

「ん・・・」

と孝典は周りを見回した、知恵が椅子に座って寝ていた。

「知恵・・・？」

（寝顔見せるとは・・・無防備で可愛いな・・・何でここで寝てるんだ？・・・）

「知恵さーん」

と孝典は知恵に抱きついた。

「ふぎゃっ」

と知恵は声をあげた。

「まさか・・・うちが寝てる間に・・・というつか・・・離してよー・・・」

と知恵は孝典の頭を押した

「はいはい・・・で何でお前はここで寝てるんだ？」

と孝典は不思議そうに聞いた。

「え・・・孝典君が倒れたからうちは負ぶってここへ・・・」

「んー・・・そうだったけど・・・あんまり覚えてない・・・」

孝典は記憶がなかった。

「そつかゝ．．ごめんね．．．うちのせいで」

「何の事が知らないけど別にいいさ」

「夢でどつちから告白するかを決めた時の夢で拓也に会えたし．．  
ふあゝあ」

と孝典は嬉しそうに言った。

「ほあゝ．．告白ですか．．．そういえば寝てる間にうちに何かした!？」

「いやいや．．する気無いし．．．」

「無いんだ．．．」

「無いと言ったら嘘になるみたいだな」

と孝典は言った。

「まあ．．よかった．．孝典君が元気で」

と知恵は言った。

「ふあゝあ．．．また．．．眠いから寝る．．．」

と孝典は言った。

「お休み」

と知恵も寝た。

カチャッ バタンッ

「ただいま」

と詩織が帰ってきた。

「寝てる・・・」

（孝典さんまた泣いてる・・・）

「ん・・・お帰りなさい・・・詩織さん・・・」

（本当だ・・・孝典君泣いてる・・・）

と知恵が起きた。

「あの後孝典さんどうでした？」

「何か覚えてないってさ・・・」

「そうでしたか・・・」

「案外よかったかも知れませんね・・・」

「はい・・・」

と知恵と詩織は話した。

「そついえば詩織さんは孝典君の事どう思ってるんですか？」

「え？」

「いや・・・、好きか嫌いかな・・・どつちかな・・・って思ってる・・・」

と知恵は言った。

「嫌いではないですね・・・」

「つまり・・・好き・・・？」

「友達としては好きですね・・・」

「そつかあ・・・」

「あ・・・孝典君から聞いたんだけど・・・詩織さんにどつちから告白するか決めてみたいですね」

「え？」

「いや、孝典君が夢でその時の拓也さんに会ったって・・・」

「そ、そうですね・・・」

（どつちからって・・・二人共だったんだ・・・）

とドキドキしだした詩織だった。

## 第8話 七夕の夜（前書き）

今日が七夕という事で即作ってみました^^  
（15歳の小説だからね・・・）

## 第8話 七夕の夜

- 深夜 -

あの後、知恵は孝典の家に泊まり、詩織と知恵はもう寝ていた。

「何も見えない・・・今何時・・・」

と孝典は辺りを見回し言った。

「おい・・・」

と言っても詩織と知恵は別部屋で寝ている・・・。

・・・カチャカチャッ

と孝典はあかりをつけた。

「もうこんな時間か・・・」

「テレビも何もしてないし・・・」

「・・・」

「二人の寝顔見てみるか（笑）」

と言って孝典は知恵の部屋から入った。

ガチャッ・・・

「Z Z Z・・・」

「そういえば・・・知恵さんって無化粧だっけ・・・」

ツンツンツ・・・

と孝典は知恵の唇を突いた。

ガブツ

「痛っ！」

と知恵は孝典の指を思いつきり噛んだ。

「ん・・・何・・・」

と言つて知恵は頭を掻きながら起きた。

「何してるの・・・」

と知恵が孝典が指を抑えてる所を見ていた。

「お前に・・・指噛まれたんだよ・・・」

と孝典は痛がりながら言つた。

「それだけ・・・？」

「それだけ」

「ふーん・・・」

「・・・寝る」

と言って知恵は布団をかけ直した。

「知恵さーんと一緒に寝ようよ」

と孝典は遊び半分に言った。

「寝てもいいよ・・・」

と知恵はこつちを向いて言った。

「いや・・・結構です・・・」

と孝典はまさかの発言に戸惑った。

「じゃあ・・・お休み・・・」

と言って知恵は布団を被った。

バタンッ

（本当に寝てもよかったのに・・・）

と知恵は心の中で思いながら寝た。

（危なかった・・・空気に身を任せそうに・・・）

「今度は詩織さんの部屋へ行ってみよう・・・」

ガチャッ

「あ、起きたんですか・・・」

「あれ・・・寝てなかったんだ・・・」

「はい・・・ちょっと予習とかありましたので・・・」

「何かご用でしょうか・・・」

と詩織は机に向かったまま言った。

「いや・・・寝顔見てみようかなと思ってたから・・・」

「知恵さんの寝顔の方が可愛いですよ」

「いや・・・さっき行っただけ指噛まれたし・・・」

「行っただんですか・・・」

「じゃ・・・俺はこれで・・・」

「はい・・・」

バタンッ

孝典は少し詩織の寝顔を見れなかったのを残念に思った。

「これから何しようかな・・・」

と孝典は一人考えていた。

ガチャッ

「知恵？」

と孝典は振り返った、知恵ではなく・・・詩織だった。

「詩織か」

「うん・・・」

「どうしたの？」

と孝典は詩織に尋ねた。

「いや・・・何でもないよ・・・」

と詩織は椅子に座った。

詩織はあの事を聞いてみる事にした。

「ね・・・ねえ孝典さん・・・3年前に拓也さんと何か・・・決めました・・・？」

「その・・・約束とか・・・」

と詩織は孝典に決心して聞いてみた。

「あえ・・・？誰に聞いたの？」

と孝典は驚きながらも聞いた。

「知恵さんに・・・」

と詩織は本当の事を言った。

「あいつ・・・」

「あの・・・それで・・・」

「あ・・・いや・・・」

「・・・・・・」

としばし沈黙が続いた。

「何かごめんね・・・」

と詩織は部屋へ戻った。

「何かごめんねって・・・詩織さん悪くないような・・・」

「ん・・・・・・どう言おうか・・・」

「・・・・・・」

と孝典は思いながらも布団へ入って寝た。

・翌朝・

「おはよう」

「・・・・・・・・」

「皆寝てるんだ・・・」

と一番に目覚めたのは詩織だった。

ガチャツ・・・・バタンツ・・・・

詩織はそーっと朝食を買いにコンビニへ行った。

「・・・・・・・・あれ・・・・誰も起きてないのかな・・・・」

と孝典はゆっくり立ち上がって詩織の部屋へ行った。

ガチャツ

「あれ・・・・居ない・・・・」

バタンツ

「今度は知恵の所へ行ってみよう・・・・」

と孝典は知恵が寝てる部屋へ行った。

ガチャツ・・・

「あれ・・・知恵は寝てる・・・」

バタンツ

「んー・・・」

「まあ、すぐ帰ってくるだろう・・・」

と孝典は布団へ入ってまた寝だした。

ガチャツ

「おはよう」

と知恵は起きてきた。

「あら・・・孝典君寝てる・・・」

「そついえば昨日・・・」

と知恵は孝典が寝てる横へ座った。

ガチャツ・・・

と家のドアが開いたが知恵は気づいていなかった。

「ふふふ・・・無防備ですねえ」

「しても・・・ばれないよね・・・」

と言って知恵は孝典とキスをしようとしていた。

ガチャッ

リビングのドアが開いた。

「ただいま・・・」

「!!!!!!」

「お・・・おかえりなさい 詩織さん」

「起きてたんですか・・・知恵さん・・・コンビニで・・・朝食買ってきたので・・・どうぞ」

と言って詩織は買い物袋を机に静かに置いて、椅子に座った。

「ハクシュンッ」

「んー・・・」

と孝典はくしゃみをした。

「フッフッフ・・・フッフ・・・」

と知恵と詩織は笑いを堪えていた。

「んー・・・んー・・・ん!」

と孝典は突然目を覚ました。

「アハハハハハ（笑）」

と詩織と知恵は笑いを堪えきれなかった。

「?????」

孝典は状況が分からなかった。

「あ、そうだ！孝典さん今度は孝典さんの朝食買いしましたので」

「あ・・・ありがとう・・・」

「食べて早く学校行きましょう（微笑み）」

と詩織は言った。

「????????今日何かあったっけ・・・」

と孝典と知恵は疑問に満ちていた。

・学校・

「今日は7月7日！七夕だねえ」

とクラスメイトが言った。

「そっか・・・七夕か・・・」

と孝典は今気づいた。

「ねえ、今日は。君の家で星見た？」

「俺の家？・・・今日両親居なかったらな」

「え・・・」

とクラスメイトのカップルが話していた。

「家で星か・・・」

と孝典は想像していた。

「七夕だあ」

と知恵が近づいてきた。

「子供かよ・・・」

「ん・・・子供と大人の中間だよ！」

といつもながらの事を言った。

「夜3人で星でも見るか？」

「やった〜！」

と知恵は喜んだ。

「んー・・・でも詩織さんどつだろうな・・・彼氏と見るのかな」

「彼氏？」

「あ、いや 居てもおかしくないだろ・・・」

「うん・・・」

「そういえば知恵・・・お前は彼氏が出来ない性格なのか？」

「性格なんだ・・・」

「まあ・・・夜星見る為にお菓子とか色々買わないとな」

「うんうん！」

と知恵と詩織？と孝典で星を見る事になった。

- 昼休み -

孝典は詩織さんのクラスへ行こうとしていた。  
すると

「今日一緒に星見るか」

「いいけど・・・」

と知らない男子の声と詩織の声が聞こえてきた。

「でも・・・孝典さんに言わないと・・・」

「いいじゃん別に、あっちはあっちで把握するだろ」

とその男子は言った。

「行つてこいよ」

と孝典は言った。

「え・・・?」

「俺は知恵さんと見るし」

「そ・・・そうなんだ・・・」

「これで決まりだな」

とその男子は言った。

「じゃ、楽しくやれよー」

「うい」

と言って孝典は自分のクラスへ戻った。

「どうだったー?」

と知恵が聞いてきた。

「彼氏と一緒に過ごすらしい」

「そうなんだ・・・」

（彼氏居たんだ・・・）

と知恵は少し俯いた。

「まあ・・・俺達は俺達で楽しくやろうぜ！」

「うんうん」

「まあ・・・学校終わったらさコンビニ寄るか」

「はい」

——学校が終わった——

「んー・・・お菓子とか何いるかな・・・」

「ジュースとー・・・何かお菓子とー・・・後何か」

「これだけでいいか・・・」

「ありがとうございました」

と孝典と知恵は買い物を済ませた。

カチャッ ガチャッ バタンッ

「さてさて・・・準備でもするか」

「うん」

ドタバタッ

――20分後――

「ふう・・・終わったね」

「だなー・・・」

ふと二人は外を見た。

「うわー・・・凄い・・・」

「だな・・・」

と二人は少し星を静かに見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「しかし・・・この光景を詩織さんと彼氏は見てるんだろうね・・・」

「だね・・・いつから居たんだろうね・・・彼氏・・・」

「まあ・・・詩織さんには詩織さんの考えがあるからいいじゃないか・・・」

「だね・・・」

「俺達もそういう関係になるか・・・」

と孝典は小声で言った。

「いいよ・・・」

「え・・・聞こえてたのか・・・」

「地獄耳だからね・・・」

「・・・・・・」

「ねえ・・・孝典君・・・さっきの事って・・・嘘？」

「半分半分かな・・・」

「・・・本当が全部になって言ってくれたら・・・嬉しかったなーっ」

と言いながら知恵は寝転んだ。

「知恵ってさー、悪い所一杯あるんだよね・・・」

「そうなの・・・？」

「ああ」

「例えば・・・？」

「馬鹿っぽい所とか・・・寝てる時唇つんつんしたら指噛むし・・・」

「それから・・・？」

「それだけかな・・・」

「そっか・・・あんまり悪い印象は無かったんだね・・・よかった・・・」

と言つて知恵は泣きながら微笑んだ。

ギュッ

と孝典は知恵の手を握った。

「眠いから寝る・・・」

「え？なら手離してよ・・・」

「いいじゃん・・・一緒に寝ようよー」

と孝典は言った。

「何か変な事絶対しない？」

と知恵はこっちを向いて言った。

「しないって」

と孝典は即答した。

「じゃあ．．いいよ」

と知恵は言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3289h/>

---

あの日の出会い

2010年11月14日09時24分発行